

高 山 如 大 地

— 第133号 —

発行人 辻森 正顯 発行所 富山市総曲輪2丁目8-29 真宗大谷派富山教務所 編集 富山教区如大地編集委員会



本堂前に掲げられた御遠忌法要の高札

富山市総曲輪2丁目の真宗大谷派富山別院

「教区・別院御遠忌を
一年後に控えて」の雑感

一昨年の本山での御遠忌法要において、「宗祖としての親鸞聖人に遇う」ということが基本理念として掲げられてあった。自分が基本理念として掲げられてあった。自分自身は、これを、自分が出遭っている親鸞像の問題として、ぼんやりと受け止めていた。「親鸞聖人」とよく口に出して言うが、その「親鸞」とは一体誰のことを指しているのか。残念ながら明確な親鸞像があるわけではない。『教行信証』の後序に「諸寺の釈門」という言葉が出てくる。これは、念佛への弾圧を惹き起こした南都北嶺の寺のことではある。けれども、浄土真宗の寺に住む者のことではないと読み過ぎていいものなのか。

この「諸寺の釈門」という文字の上に、自分自身を重ねた時、その次の言葉が妙に心に掛かる。「教に昏くして眞仮の門戸を知らず」。もし、今、親鸞聖人が実際いらっしゃったならば、自分は恥ずかしくて、とても側に近づけないだろうと想像してしまう。仏教が「寺」という形をとった時、「教に昏く」なつてていく要素を、親鸞という人は見ていたのではないかと。こんな感じで想う程度だ。それでも、「教に昏くなる」とは、どういうことなのだろう。自分の讀嘆は誉め殺しになる」という言葉を聞いたことがある。それは仏教を勉強しないという意味ではないだろう。

「答え」としての親鸞から「問い合わせ」としての親鸞へ——。以前に「凡夫の讀嘆は誉め殺しになる」という言葉を聞いたことがある。宗祖を讃仰するという形で、結局、宗祖を知らず知らず自分の等身大に引きずり降ろしてしまつているということだ。肝に銘じておくなくてはならない。

山別院 御遠忌法要 特集

—親鸞からのメッセージ—

なお、如大地編集委員会は、御遠忌委員会より、御遠忌法要までの広報活動の内、文書広報を委託されました。ただいま紙面による御遠忌広報の仕方を検討しています。こんな記事、こんなコーナーがあればいいなというご希望がございましたら、『如大地』教務所担当までご連絡ください。

(富山教務所 TEL 076-421-9770)



高札立柱式終了後、別院会館にて御遠忌委員会総会を開催。
現在の進捗を各部会長から報告。委員間で共有した。



教化推進部長から



去る二〇一三年五月二十三日、いよいよ間近に迫ってまいりました教区・

別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を内外に知らせる高札の立柱式が執り行われました。

教化推進部会においては会合を重ね、讃仰事業として「百人百話」を開催していく準備をいたしております。これは富山別院本堂を会場として、二〇一四年御遠忌厳修前の三月三日から五月十一日までの期間、連続して教区内の有教師の方々にテーマを設定し、普段なかなか仏縁に遇えない方々をターゲットに親鸞聖人の教えを語りかけ、「現代社会に渦巻く様々な苦悩を共有できるように」との願いで実践していくものであります。

初日三月三日のオープニング事業として、御遠忌テーマを基に三明智彰氏の講演、教区合唱団「コール菩提樹」による仏教讃歌の披露などを行います。

また、法要までの歓迎期間中、富山別院子どもまつりなど様々なイベントを検討しております。教区内の多くの有緣の方のご協力が必要不可欠であります。どうぞ、宜しくお願いいたします。

富山教区・富山別院
宗祖親鸞聖人
750回御遠忌法要

法要期間 2014(平成26)年 5月23日(金)～25日(日)

真宗大谷派 富山教区・富山別院ホームページ <http://toyama.higashibetsuji.com/>

富山教区・富宗祖親鸞聖人七百五十回

[御遠忌テーマ]

私は何を願つて生きるのか？

来年5月の教区・別院宗祖聖人御遠忌法要までちょうど一年前となる5月23日、富山市総曲輪にある真宗大谷派富山別院にて高札立柱式が行われました。閉式後は御遠忌委員会総会が開催され、現在の進捗確認、今後の準備について審議されました。今回の記事は、御遠忌委員会教化推進部長の北條秀樹氏、法要参拝部長の和田 度氏、そして御遠忌テーマ作成に関わられた教化推進部会委員の石川正穂氏から寄稿いただきました。



法要参拝部長から

法要参拝部では、御遠忌法要厳修に向けて、御遠忌法要参拝促進及び参拝者の受け入れに関する事項の三点を協議しています。

まず、日程及び儀式に関する事項については、

この富山別院で執り行い得る最も重いお勤めを基本とし厳修することを掲げました。五十年に一度の御遠忌をお迎えするにあたり、先人たちが造り上げてきた歴史をこの法要で皆さんと一緒に厳修したいとの思いからであります。勤行というのは、

仏徳讃嘆、報恩謝徳を体現していますので、御遠忌を迎えた喜びを最上な形で表現するという思

いで検討しております。一座一座のお勤めの時間は長くなりますが、ご門徒の皆様、参詣の皆様と一緒にその時間を共有していただきたいと願つてのこととであります。

次に、莊嚴仏具に関する事項ですが、御遠忌を機縁として、別院本堂の内陣御修復、不足している仏具の調製を考えております。

最後の参拝につきましては、各組の団参をお願いすることになると思います。その中でも特に晨朝と御伝鈔の参拝者をいかに増やすか悩んでおります。富山教区での蓮如上人御遠忌の時は、教区内寺院方の出仕者が少なかつた様に思います。お一人何座でも出仕して頂けませんでしょうか。御遠忌円成に向け、皆様方の絶大なるご協力をお願ひ致します。

第十組 應聲寺 和田 度

第十一組 玉永寺 石川正穂

おかしなテーマだ。自分が何を願っているなんて分かり切っているだろう。そりや家族や友人の幸せや、日本の繁栄を願っているって。そう思いますよね。

ドラえもんに「どくさいスイッチ」という話があります。気に入らない人を消してしまえるアイテムを手にいたれたのが太。思い通りに使い続けた末、ついに一人ぼっちになってしまったという話です。私たちが願うことはそれくらい一人よりです。時には隣国を、隣人を、すべてを消し去りたいほど恨み、憎んでしまう。

さて、そんな私たちに親鸞聖人は次のようなメッセージを遺してくださいました。

如來淨華の聖衆は
正覺のはなより化生して
衆生の願樂ことごとく
すみやかにとく満足す

願うべきことが明確に

なるならば、人間の有象無象な願いはすべて、あらゆる人々を淨土往生させという、弥陀の本願一つにおさまっていくのだとおっしゃっているのでしょうか。とても不思議な言葉だと思います。

私は、御遠忌テーマを通して、この聖人からのメッセージを確かめて行きたいと思っています。



これからの中朋会運動を考える

今号は、中朋会運動について石川正生氏に寄稿していただきました。石川氏は、中朋会運動が始まったころから、富山教区や本山において様々な形で中朋会運動に関わってこられた方であります。

また編集委員会では、中朋会運動についてもつと知るための本を三冊選んでみました。これらは今でも手に入ります。是非参考にしてみて下さい。

中朋会運動に思うこと

『富山如大地』百三十二号に掲載された、柴田秀昭氏の特別寄稿「中朋会運動とは」を拝読しているとき、法友から便りが届いた。

そこには、「柴田氏が指摘した問題点を課題としながら、教区では中朋会運動をどのように受けとめ、願いをもち、今日まで歩んできたのか緊急に検証し、それを踏まえて教区の将来に向かってどのように進むべきか、共に話し合うことが、今一番求められることでないか」と綴られていました。

その便りの中に、特に希望することとして、「今日の現実として、加速的に進んでいる寺院離れ、世代交代による意識変化、勤務・生活形態の多様化、分散化による家庭の崩壊、孤独死、自殺、公害、原発問題等」を見つめ、「一、中朋会運動が本当に富山教区に在ったのか。二、在ったとすれば今日何を育て、残したか。三、今後、中朋会運動がどんな方向と具体的な活動が考えられるか。」という三点を念頭に持ちながら話し合う場を求めていた」と記してあった。

この法友の便りを読んでいる頃、富山別院を会場として、富山・高岡教区合同で、宗門がこれまで中朋会運動を推進していく願いをもって、教区、組の改編等を考える内局巡回が開催されたり。その会では、制度機構、財務体制、地方宗務

機構等について色々意見が交わされた。中朋会運動について、一人の方が「中朋会運動五十年、今日のすがたを見ていると余り活気がなくなっている。失敗したと思う。」との発言があり、重い空気が一瞬流れたことを記憶している。

今年の五月、第十一回世界中朋大会が、多くの参加者のもと真宗本廟にて開催された。京都に向かう電車の中で、池田勇輔先生の講演録である『いのちとひかり』(東本願寺伝道ブックス)を読んだ。親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマから学ぶことなどを内容として発行された本だ。この本の中で池田先生は、今でも憶念しているやり取りがあると述べられている。真宗中朋会運動二十五周年の節目の時、ある方が「中朋会運動をいろいろご苦労しやってきたけれども、挫折しましたね。失敗ですね。」と訓覇信雄先生に言った。すると「中朋会運動って始まってるんかね。」とひとこと言われた。このひとつとで、色々説明がましいことは、吹っ飛んでしまった。そういうひとことであったと……。

富山教区の中朋会運動の初期の頃は、特伝が実施される三年前から企画立て、お待ち受け準備を行なっていた。現在は、あの当時からみると、確かに熱意を感じられないかも分からぬが、今一度、初心に帰り「あなたに本当に中朋会運動が始まっているんかね。」と問いかながら、共に語り合える「場」で育てられていきたい。それが私の中朋の会です。

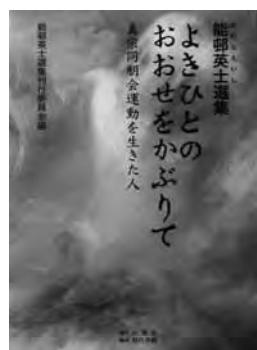
第十一組 玉永寺 石川正生



①



②



③

大谷派なる宗教的精神 —真宗中朋会運動の源流—

2011年に宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌、2012年に真宗中朋会運動発足五十年を迎えた。本書にて清沢満之・曾我量深・金子大榮・安田理深・高光大船などの先人の偉業をたずね、真宗中朋会運動を学び直しませんか。

著者：水島見一
定価：本体1,000円(教務所購入で2割引800円)
発行：東本願寺出版部

中朋会運動の願い —共にと言える生き方を求めて— (伝道ブックス74)

中朋会運動が始まった背景とその願いを学ぶ入門書。封建的な宗門のあり方に危機感を唱えた「宗門白書」、宗門がより処とすべきとされた清沢満之の思想から、一人ひとりの信心が繰り返し問いかねられてきた歩みが中朋会運動であることを学ぶ。また、現代社会の諸問題を見つめ、社会に対してどのように親鸞聖人のみ教えが開かれていくべきか、共に考え、実践していく大切さにふれる一冊。

著者：草間法照
定価：本体250円(教務所購入で2割引200円)
発行：東本願寺出版部

能郷英士選集 よきひとのおおせをかぶりて —真宗中朋会運動を生きた人—

「恋はむしろ、失恋に涙するときのほうが、人生をより深く知る機会……悲しみのわかる心こそ、本当に豊かな人間性であります」と能郷師は語りかける。産経新聞連載のこの“語る”は、生きがいいじめ・終末論・病・挫折・孤独……など、現代が抱える問題を語り、光明を探る。本書は、真宗大谷派元宗務総長であった著者が、戦中・戦後の体験から、また苦渋の“お東紛争”等の中から、親鸞聖人の教えに照らされ学んだ智慧を、宗門内外に伝える。

著者：能郷英士(編者：能郷英士選集刊行委員会)
定価：本体2,200円(税別)
発行：㈲百澤社 (TEL 03-5155-2615)

※ ①、②は富山教務所にて購入可。③は発行元に連絡し購入下さい。

内局巡回を終えて

期日 二〇一三年三月十八日 会場 富山別院

去る三月十八日、本山から岩坂賢龍参務が出向され、富山で感じたことについて述べてみたいと思います。



第一部では、冒頭に岩坂参務から「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」への協力について御礼が述べられ、引き続き、宗務全般について現況と展望の説明がありました。なかなか厳しい宗門の現状が示されたと受け止めています。説明後の質疑の時間に、私から次の事項について質問致しました。

①宗門財政の課題提起

※護持金制度「同朋会運動推進負担金(仮称)」について

②教学教化

推進員養成講座・組同朋総会について

③同朋会運動の現状と評価について

この中でも、特に宗門財政の課題提起として示された護持金制度、「同朋会運動推進負担金(仮称)」の導入には強い関心を持たざるを得ません。これは相続講金(院号、収骨)では充當できない新たな賦課金であり、富山教区においては実質的な負担増につながるのではないかと思われます。宗門の運営には応分の負担をすべきとは思いますが、慎重な検討が必要と思われます。教区の皆様にも関心

を持つて頂きたい課題です。

第二部では、教区改編についての質疑が行われました。御承知のように中央改編委員会から富山・高岡両教区合併の試案が提示され、現在、

両教区間で地方協議会を立ち上げ、協議を続けています。そうした中で、今回の内局巡回

合同開催は、両教区の多くの皆様と課題を共有することを願つてのものでした。ここでは、地方協議会議長である高岡教区の北條康丸議長から次の事項について質問がなされました。

①教区改編の時期(御遠忌後三年を目途)

の変更は考えられないか?

②全国の他教区間の地方協議会の進捗状況

は如何か

③教区改編と別院問題について

これに対して内局からは、引き続き改編に取り組んで行くとの姿勢が示されました。兩教区内では、現時点での教区改編には慎重な意見が多いと思います。私自身も改編には適切な時期と環境の整備(特に三別院の将来展望)が必要と考えています。

時代の変化と宗門の将来を考えるとき、宗務機構・財政の改革は不可避であり、教化の在り方も問われていると思います。今回の内局巡回を終えて、私達こそがこうした課題の当事者であることを改めて痛感しています。こうした課題を共有しながら、来年に迫った教区・別院の「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」に取り組んでまいりたいと考えています。皆様のご協力をお願い申し上げます。

教区秋安居の日数はわずか一日半。講録の駆け足的説明に物足りなさを感じていた。こ

れは安居を受けるしかない。蓮如上人の言葉にも「年よれば歩もかなわず、ねむたくもあるなり」とある。今、今しかない。後先をも考えず申し込みをしてしまった。さっそく本講録が送られてきた。最初から終わりまで目を通しては見たもののまつた歯が立たない。ついていくのか。不安な心のまま開講式に臨んだ。

講義の内容は刺激的なものだった。心配した「ねむたくもある」状態に陥ることが無かったのには私自身が驚いた。しかし残念ながら基礎知識不足は覆い隠すべくもなかった。それをかろうじて補ってくれたのは講義の説明や疑問点に答えてもらえた攻究であった。御影堂での満講式で講者からの満講の辞を聞いたときは安居聴講は無駄では無かったと思った。言葉の内容が理解できたのだ。しかし、それが「わかったつもり」の世界であったということをすぐ思い知らされた。富山教区主催の秋安居を前にしての講録輪読会(真宗教学講座・教区寺族研修小委員会主催)で改めて読み直せばわからないことばかり。

私にとっての 安居とは



教区秋安居の様子。
二日間の日程中、多くの方が熱心に受講された。



2012年度教区主催の秋安居で講義する小谷信千代氏(昨夏本山安居本講講者)。内容は『無量壽經優婆塞願生偈(淨土論)』を講本とし、「世親淨土論の諸問題」を講義した。

落ち込んだにもかかわらず、今年の講題をみたら早速ホテルを予約してしまった。

第十三組 西心寺 田中慶視

富山別院報恩講 法話

「報恩の歩み」

九州大谷短期大学 副学長 三明智彰 氏



いたしまして、親鸞聖人ならびに如来大悲の御恩を知り、その御恩がえしのまことを尽して行くことを期する法要です。親鸞聖人は、一一七三年にお生まれになり、一二六二年にお亡くなりになられました。それで今年二〇一一年は七百五十回御遠忌の年なのです。

五十年に一度の節目の法要を「御遠忌」と申します。御本山の御遠忌法要に「今年はお参りはしないで、次の機会にしよう」という方もおられたかもしません。次回は五十年後の八百回御遠忌です。私どものほとんどは、到底お参りできないでしょう。

しかし、五十年後の八百回御遠忌がきちんと勤められるように、お念佛相続、ご信心の相続をしていかなければならぬ。それが御遠忌の年に期すべき重要事項であると思います。

今日は皆様方お気付きのとおり、内陣のお飾りがいつもよりも盛大で華麗です。特に御注目いただきたいのは、

左手の余間に掛軸が四幅ございます。報恩講には『御伝鈔』拝読があります。『御伝鈔』とは、本願寺第三代の覚如上人が書かれた親鸞聖人の御生涯の記録です。親鸞聖人の伝記の大切なところを抜き出したもので、元々は、絵と文章とがそろった絵巻物になっていました。その絵の部分を四幅の掛け軸に

にされました。伝記の絵なので、「伝繪」といいます。親鸞聖人のご誕生から大谷の廟堂建立までが描かれています。大谷は親鸞聖人のお墓どころです。そこに、お堂を建てて、聖人の御木像を安置しました。それが本願寺の由来です。

親鸞聖人という方はどういう方ですか、私達とどういう関係があるのでしょか。私達は親鸞と呼び捨てにするよりも親鸞聖人、さらには宗祖という言葉をつけて「宗祖親鸞聖人」とお呼びします。

真宗門徒とは

親鸞聖人は、学校の社会科の教科書の、日本の歴史、鎌倉時代のところに必ず出ています。鎌倉新仏教の代表的な方で、日本の歴史上大変重要な方であるというばかりでなく、親鸞聖人と私達には、深い御縁があるのが、真宗門徒という私達なのです。

そもそも門徒とは何ですか。門は出入りするものです。さとりの世界である浄土への出入口が「門」である。その場合、門とは教えを意味します。次に「徒」は何かというと、例えば今も

このたびは、稀な御縁をいただきまして、報恩講に御法話させていただこととなりました。「真宗とはどういうことですか」ということと、「親鸞聖人はどういうことを教えて下さった方ですか」という二点を、念頭に置いてお話を申したいと思います。

報恩講は、親鸞聖人のご命日を縁と

使われているのは学校の「生徒」ですね。それで「門徒」とは教え子ということであろうと思います。真宗門徒は、真宗の教え子です。先生は誰ですかといふと、親鸞聖人なのです。お内仏に、親鸞聖人の絵を掛けているのが真宗門徒ですね。

元々は、どの宗派でも門徒という言い方はあったはずですが、今や門徒というと真宗門徒のことです。

そして、親鸞聖人のことを「宗祖」とお呼びします。昔は「御開山」とい

う呼び方が圧倒的に多かったと思います。この「山」というのが教えの根本道場のことを示すのです。それで、教えを明らかになさったので「開山」に尊敬語の「御」の字をつけて「御開山」と呼ぶわけです。

また、「祖師聖人」というと親鸞聖人のことです。「祖師」とは、偉大な先生、大先輩の先生という意味です。報恩講に拝読される御文に「御俗姓の御文」があり、「それ、祖師聖人の俗姓をいえば」と始まるのです。その祖師とは、親鸞聖人です。その人を尊敬し、「宗祖」と仰ぐのが真宗門徒です。

そこで、眞のむねということについて、蓮如上人の「大坂建立の御文」を

たずねたいとおもいます。

あわれ、あわれ、存命のうちに、みなみな信心決定あれかしと、朝夕おもいはんべり。あいかまえて、あいかまえて、この一七か日の報恩講のうちににおいて、信心決定ありて、我人一同に、往生極楽の本意をとげたまうべきものなり。

(「大坂建立の御文」真宗聖典八三二頁)

とあります。

蓮如上人は本願寺第八代であります。室町時代に親鸞聖人の御教えを明らかにし、広くお伝えなさった方です。「御文」は蓮如上人がお書きになられたお手紙です。先ほど、勤行後に読まれましたのが、この「大坂建立の御文」です。蓮如は八十五歳の四月にお亡くなりになるのですが、その前年の報恩講のために書かれました。蓮如上人は、

その夏から体調が悪く、今度の寒中のうちには命が終わるのではと思われる、そういうような中でお書きになつた「御文」です。そういうことを思いましたと、痛切な、お心のこもった「御文」なんだなと窺われると思います。遺言書ともいべきお手紙であります。

蓮如上人は、晩年大坂は石山というところ、現在の大坂城のところに坊舎を建立なさいました。大変な御苦労を

経て、山科に本願寺を復興なさり、そ

れから今度は大坂の石山に坊舎を建てられた。

その御坊を建立された趣旨は、いたずらに花鳥風月に心を寄せ、栄華榮耀の為に氣樂に暮らすそのためのではなく、親鸞聖人の御教えを聞いて、まことの御信心の人が出てくれるよう願ってのことである、といわれるのであります。

この御文に、「あわれ、あわれ」というのは、ああ～っていうことですね。情が強く動かされる、そういう表現です。「存命のうちに」とは、私が生きているうちに、みなみな信心決定するようにと朝夕思っています。終わりのところの「あいかまえて、あいかまえて」というのは、くれぐれもということです。「一七か日の報恩講」は、十一月二十一日から二十八日までの報恩講です。

蓮如上人はいかなる危難の中でも、命を狙われ、迫害された中でも報恩講を絶やさず勤めてこられた方です。それで、「この一七か日の報恩講のうちににおいて、信心決定」と、もう一回「信心決定」と書いておられるのです。「我人一同に」、私も人も同じように「極楽往生の本意をとげたまうべきものなり」と。尊敬語で結ばれています。極楽往生が本意だというのです。誰の

本意ですかと、「我人一同」の本意です。我人ともに極楽往生が本意であると仰るのです。私ども普段ど

うですか。建前と本音がありますが、本音の方が本意ですね。本音は何ですかといつたら、色と欲ではない。勝つ負けたではない。そういうものよりもっと本意があるというのです。その本意は」と、極楽往生だと。極楽往生すべき人生を歩むというのが、私ども人として生まれた本意だというのです。これをちゃんと心得てもらいたいという「御文」です。どれほど地位や名譽が上がつても、収入が多くなつても、それでも本意ではない。真の拠り所は、往生極楽の大事である。大事とは、何はさて置いても、真っ先に優先しなければならないことです。往生極楽が一番大事な事柄だということを、蓮如上人は仰っておられるわけです。

真宗——まことのむね——

真宗の「宗」の字は、訓読みすると「むね」です。人間の体でいうと、心臓や肺があるところが「むね」です。これが無ければ生きていけない、それが「宗」です。また、お話の「宗」というと、要點ということです。肝心、要の事柄というのが「宗」です。この宗とはなんですかと、いうお話が、この

眞宗ということの話題になるわけです。「眞」という字は「まこと」。「眞」は

「眞」というだけじゃ「眞」かどうかわからない。そうすると「眞」でないもの、仮や偽りのものを明らかにしていく働きが「眞」ということなのです。「眞」が明らかになるときに、仮や偽りのものが露わになるわけです。その「眞」の「宗」とは何かを問うのが、眞宗の教えの大変なところなのです。

蓮如上人のお書きになられた「電光朝露の御文」には、

もしだいまも、無常のかぜきたりてさそいなば、いかなる病苦にあいてかむなしくなりなんや。まことに、死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も、財宝も、わが身にはひとつもありそうことあるべからず。されば、死出の山路のすえ、三途の大河をば、ただひとりこそゆきなんぞれ。

(「電光朝露の御文」眞宗聖典七七二頁)

これは親鸞聖人の御歌だといわれてあります。「もしだいまも、無常のかぜきたりてさそいなば」。無常の道理が露わになり、無常の風が、おいでと誘つたら、どのような病苦であつて命が終わるだろうか。まことに死ぬ時は、前から頼りにしていた奥さんも子供も財宝も、我が身には一つ

もついて来ません。死を前にしたときには、今まで頼りだと思っていたものが、なんにも頼りにならない。頼りにならないものを頼りだと思い込んでいた間違いに気付かされる。このことに早く、今から元気なうちに気付かなければいけないのでですか、というのが「眞の宗」の話です。

二〇一一年三月十一日、大震災・大津波がおこりました。そして原発の爆発。「想定外」という言葉がしばしば語られました。想定外は想定の外のこと。思いの外のことです。思いの外のこととは、結局、「この世」のことです。だから予想がついていたということとは本当はほとんどないのです。一寸先は闇、いったん事があればどうなるかわからないということです。

お書きになったのは蓮如上人です。「御文」は「あなかしこ、あなかしこ」で結ばれます。「かしこ」というと、手紙の結びの言葉です。「かしこ」は「かしこまる」ということですから、「敬具」と同様です。相手を敬って結ぶということです。それに「ああ」という意味の感動・詠嘆の「あな」という言葉が付いています。さらには蓮如上人の「御文」の場合は、尊いおみのりを敬つて、それで皆様方へ信心獲得を呼びかけて結ばれるということで、「あなかしこ」という具合に結ばれるわけでしょう。

明日ありと思う心のあだ桜
夜半に嵐の吹かぬものかは
おりますが、その意味は、今は元気でいても命終の時がいつ訪れるかわからない。うかうかと過ごしていると、一生空しく過ぎて終わってしまうということです。この世に生まれた意義を本当にあります。この信心決定なしに御恩報謝も何もないのです。

恩徳

「結願逮夜」勤行の終わりに、「御俗姓の御文」が読まれました。「それ、祖師聖人の俗姓をいえば、藤氏として」とありました。「祖師聖人」とは親鸞聖人のことです。親鸞聖人はどういう方かということをまずお述べになって、最終的に帰するところは報恩講の願い、皆皆信心獲得することが報恩感謝です、報恩講の期間において眞の信心を決定しましようということを勧められた「御文」なのです。

お書きになったのは蓮如上人です。「御文」は「あなかしこ、あなかしこ」で結ばれます。「かしこ」というと、手紙の結びの言葉です。「かしこ」は「かしこまる」ということですから、「敬具」と同様です。相手を敬つて結ぶということです。それに「ああ」という意味の感動・詠嘆の「あな」という言葉が付いています。さらには蓮如上人の「御文」の場合は、尊いおみのりを敬つて、それで皆様方へ信心獲得を呼びかけて結ばれるということで、「あなかしこ」という具合に結ばれるわけでしょう。

「御俗姓の御文」の中に、かの御恩徳のふかきことは、迷慮八万の頂、蒼瞑三千の底」とはどういうことですか。「迷慮」とは、スメールという名前の山です。日本の普通の読み方だと「須弥山(しゅみせん)」です。どういう形をしているかというと、阿弥陀如来のお立ちのところの下の壇の台形の形の元になっているといわれている想像上の山です。モデルはヒマラヤだと思いますが、世界で一番高い山、世界中の山を集めたよりもなお大きい高い山です。それから「蒼瞑」は何ですかというと、これは海の底深くのことです。太平洋沖の世界で一番深いマリアナ海溝のようなところです。「迷慮八万の頂、蒼瞑三千の底にこえすぎたり」というのは、何が越えすぎているのかというと、それは「恩徳」です。報恩とは「恩に報いる」ということです。「恩」の一字は、めぐみとも読みます。「徳」は、すぐれた働きということです。「恩徳讚」では、「如來大悲の恩徳」と「師主知識の恩徳」と対句にされています。「師主知識」とは、師匠・先生です。前者が大悲のめぐみの恩徳。後者が教えを懇切に説かれ、導いて下さった恩徳。その両方の恩徳について、「かの御恩徳のふかきこと

り。

(「御俗姓」眞宗典八五一頁)

は、迷慮八万の頂、蒼瞑三千の底にこえすぎたり」と述べておられるわけです。「山よりも高く、海よりも深し」という言葉がありますが、それをもつと大きくした言葉ということです。

大きな「めぐみ」をいただいてきた。それなのに私どもはどうですか。それがあたり前だとしてしまい、傲慢な考え方になってしまいます。着るもの、食べるもの、住むところ、在るのがあたり前だと考えます。

災害、戦争ということを経験してみると、あたり前だといえることは実はないです。「俺が買ったのだから俺のものだ」と簡単にいえますか。それはお金を使っての価値の換算ということで、資本主義的には話は済んでいるかもしれませんのが、実は、資本主義だけがすべてではありません。私たち真宗門徒は、仏法主義とはいませんが、浄土真宗の教えに基づいたものの見方、感じ方、考え方を提起していかなければいけないと思うのです。

例えば、「よく生きてくれよ、悔いのない一生を歩んでくれよ。」という願いを感じて手を合わせて「いただきます」と口に出すのだと思うのです。また、この体を持って生まれたということ自体が、「めぐみ」をいただいたいということであろうと思います。

知恩報徳

ご恩を知り、ご恩をお返しする。そ

ういうことが報恩講の趣旨でござります。「報恩」とは、詳しくは「知恩報徳」といわれます。例えば、親鸞聖人が『教行信証』の行の巻の「正信偈」の直前に「知恩報徳の為に正信念佛偈を作りて曰く」とお書きになり、「正信偈」を「帰命無量寿如来」と始められます。

普段私ども「帰命無量寿如来」から「正信偈」を読み始めますが、その前に知恩報徳の為に親鸞聖人は「正信偈」を作ったといわれました。そういう気持ちまでも含んでお勤めが始まっています。

御恩に報いるということに期する仏法のつどいが報恩講です。

報恩講のいわれについて蓮如上人がお書きになられた「御文」がいくつもあります。先ほど挙げました「大坂建立の御文」・「御俗性の御文」、それからよく知られているのが「御正忌の御文」です。

そもそもこの御正忌のうちに参詣をいたし、こころざしをはこび、報恩謝徳をなしておもいて、聖人の御まえにまいらんひとのなかにおいて、信心を獲得せしめたるひともあ

るべし。また不信心のともがらもあるべし。もってのほかの大事なり。

(「御正忌の御文」真宗聖典 八三七頁)

蓮如上人は、私も含めて皆さん方に呼びかけておられるわけです。御正忌というのは、ご本山において十一月二十一日から二十八日まで勤められる御正忌報恩講です。全国の別院やお寺では、ご本山の報恩講にお参りできるよう、時期をずらして報恩講が行われるという例が多いと思います。御正忌というのはご本山の報恩講のことですが、それぞれの別院やお寺において勤められる報恩講も趣旨は同様であります。

「そもそもこの御正忌の内に報恩講に参詣をして志を運んで報恩謝徳をなすとお参りなさった人の中に、信心を得たなさった方がいるでしょう。また、不信心の人もいるでしょう」とはじまります。不信心とは信心に「不」の字がついていますから、信心決定している人、ということです。それについて蓮如上人は、「もってのほかの大事なり。」とんでもないことですよ、と仰っています。

「大事」とは、何はさておいても優先して取り掛からなければいけない事柄です。私たちは悩み苦しんで生きている。しかし、それが本当に大事なこ



とですかと問われるのが真宗の視点でございます。

真宗とは「真(まこと)」の「宗(むね)」と書く。この「宗」とは「要」。はずしてはいけない拠り所という意味です。地位や名譽やお金というのは大事かもしませんし、関心が集まるところです。それから世間体・世間の評判、それを随分と気になるけれども、それは本当の拠り所ですかというと、いわゆる世間ほど無責任なものはないでしょう。頼りにしてはならないものを頼りとしていたのではないですか。拠るべきは「真(まこと)」の「宗(むね)」でないといけません。こういうことが、真宗の基本の「大事」であります。そして「もってのほかの大事なり」とは、不信心の今まで過ごしていいのですか、何はさておいても果たさなければいけないのは信心のことでしょうというので、

そのゆえは、信心を決定せずは、今度の報土の往生は不定なり。されば不信のひとも、すみやかに決定のこころをとるべし。
 (「御正忌の御文」真宗聖典 八三八頁)

と、勧められているわけです。「報土の往生」とは極楽浄土の往生のことです。「正信偈」の源信僧都のところに

「報化二土正辨立」とあります。「報土」「化土」という二つをまとめて、「報化二土」といわれたのであります。「土」は「淨土」のこと。「報土」とは「まことの淨土」です。弥陀の誓願に報われた世界、それが「報土」。これが「大般涅槃界」という悟りの世界です。極楽淨土の眞実の淨土のことです。

蓮如上人が「大坂建立の御文」を「往生極楽の本意をとげたまうべきものなり。」と結ばれます。皆さま方そ



れぞれに願いがあり、心に掛けていることがあるかもしれません。本意は何ですかというと、一番願っているのは極楽往生です、というのであります。

らさないし、本当の幸せをもたらしません、という見極めをしているわけであります。

極楽往生以外のことは何も満足をもたらさないし、本意をもたらしません、という見極めをしているわけであります。

往生

どの人も皆、淨土に生まれたいと願つてこの世に生まれてきた。この世は、死んでから極楽淨土に往生するといいます。では今はどうしますか。今から極楽淨土往生の歩みが始まっているということです。

だから往生は「死」という字ではない。「往(ゆく)」という字に「生(うまれる・いきる)」という字である。いきいきと生きるということです。その人生のことを往生という。その往生が不定である、不確かである。信心決定しないと不確かである。信心決定することが、今、淨土往生の決定ということなんです。それで、

不信のひとも、すみやかに決定のこころをとるべし。人間は不定のさか

いなり、極楽は常住の国なり。されば不定の人間にあらんよりも、常住の極楽をねがうべきものなり。

(「御正忌の御文」真宗聖典 八三八頁)

とお勧めなさるのです。不定というのは定まらないことです。仏教読みの発音で「ふじょう」といいます。「人間」とは何ですかというと、もともとの言葉は人が住んでいる環境のことです。人間世界といえば解りやすいでしようか。つまり、人と人が会っている間の環境のことを「人間」というのであります。

例えば、家で夫婦喧嘩なさりますか。いつも威張っている、いつも焼きもち妬いているなど、「いつも」というけど、「いつも」は無いでしょう。こうと決めつけるというのが、だいたいは間違います。何事があるのかわからぬ世の中に生きているのに、いつもそうだとか、すべて予想通りと考え方が実はおかしいのです。「諸行無常」と申しますものね。もちろんの存在現象は常ということが無いのである。どんどん変わっていき、しばらくも留まらない。それなのに、無常の世の中を「いつも」同じと見るのが大間違いとすることです。觀察力が弱くなつて真の智恵が働かない状態、それが「いつも」ということなのです。この無常の

道理ということを腹に入れておかなければ駄目なのです。

空過なき歩み

この諸行無常の道理 자체は変わらないですね。まことの道理の世界のことをお申します。「常住の極楽を「極樂」と申します。「常住の極楽をねがうべきものなり」。この世の地位や名譽や目先の利害に振り回されは、あつという間に人生を失ってしまいます。忙しい忙しいと過ごして来たけれど、結局今日一日何だったのか。それが積み重なると、今年一年何だったのか。それが積み重なって、この一生何だったのか。そういうことが、「むなしくすぐる」ということです。ここに教えを聞かなくてはいけないのでしょう。

親鸞聖人のお言葉には、

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功徳の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(「高僧和讃」真宗聖典 四九〇頁)

とあります。本願力に遇うとは具体的にはどういうことでしょうか。それは、お念仏申す身になるということです。そして、お念仏申すというところに本

道理ということを腹に入れておかなければ駄目なのです。

願力を感じるのです。念仏は本願力の働きだからです。本願力の表れがお念佛、南無阿弥陀仏である。このいわれを繰り返しよく聞いて行きましょう。

お念仏申すと、弥陀の本願が思われるのです。弥陀の本願は大慈大悲です。大慈大悲とは、分け隔てのない眞実の深い思いやりの心、共に泣き、共に助けあう心です。分け隔てがないので「大」の字がついています。その大慈悲の名のりが南無阿弥陀仏なのです。

このことをよく聞き念仏申す練習をしましょう。それが仏弟子の勤めであります。

私にお念仏の声を届けてくださったのか。それが積み重なって、この一生何だったのか。そういうことが、「むなしくすぐる」ということです。

ここに教えを聞かなくてはいけないのでしょう。

親鸞聖人のお言葉には、

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功徳の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(「高僧和讃」真宗聖典 四九〇頁)

とあります。本願力に遇うとは具体的にはどういうことでしょうか。それは、お念仏申す身になるということです。そして、お念仏申すというところに本

いでしょう。ただ思いがあるだけです。そういう思いで他人を傷つけ、自分を傷つけている愚かさに気付かさせていなって、私の本性を映し出して下さる

また、この世の誤った現実を映し出して下さる。そういうことがお念仏です。報恩講において、眞の信心が決定されるということが最も願われていることです。

「大坂建立の御文」に、
極楽とは、仏とは

あいかまえて、あいかまえて、この一七か日の報恩講のうちににおいて、信心決定ありて、我人一同に、往生極楽の本意をとげたまうべきものなり。

(「大坂建立の御文」真宗聖典 八三三頁)

と、蓮如上人は、お書きになつておられます。報恩講において「我人一同に、往生極楽の本意をとげたまうべきものなり」と結ばれています。それには信心決定ということがなければならない

ことがあります。これが大事なのであります。これにより効果といいますか証がすぐにあります。これが大事なのであります。このお念仏申しながら喧嘩している夫婦は無いでしょう。ナマンダブを忘れないで下さい。

「極楽」とは、「この世」の快樂の延長上にあるものではありません。覚りの喜び楽しみの世界です。「この世」

の快樂は、苦あれば樂あり、樂あれば苦ありと相対的なものです。「これがこの世の極楽だ」とどんちゃん騒ぎをして、翌日は苦しいですね。「極楽」とは、「樂」の究極、極限。「この世」

の快樂の話とは違います。これは悟りの喜び、楽しみです。その極樂に生まれるということが、仏陀になるということです。

仏陀とは何ですか。「正信偈」の中に「善導獨明仏正意」といわれる善導大師が、「自覺覺他(じくわくかく)」覺行窮滿(かくぎょううぐまん)、これを名付けて仏とす」と仏の定義をお示しならされました。「自覺」は、自覺を持って、などと使われますが、元々の意味は、自ら目覚める、目が覚めるということです。「覺他」は、他を目覚めさせる。「覺行」は、目覚めのはたらき。「行」には、はたらきという意味があります。「窮滿」は、きわまり満ち満ちている。これを仏といふとされたのです。その目覚めの世界を極楽というのです。

私どもは、極樂往生を願いとしてこの世に生まれたのだと、こういうのが蓮如上人の教えのお言葉です。出所は親鸞聖人であり、更に、さかのぼると「大無量壽經」までさかのぼると思います。

「極樂往生の本意」ということは、現在の人生が目覚めに向かって、一步

す。釈〇〇・釈尼〇〇、これが法名で
す。「釈」の字は何ですかとすると、
お釈迦様の「釈」です。釈尊の一族で
すよ、ということです。そういうお友
達が関わる場所がお寺です。お寺の環
境というものがサンガでございます。こ
のサンガは安心でしょ。お寺でお参り
なさっているとき、ここにお淨土の写
しがあり、光が差していると思ってい
ただきたいです。そしてこの世の中に、
御同朋・御同行の社会がどんどん広がっ
ていくのが淨土真宗の門徒としての願
いです。門徒とはなんですかとすると、
教え子ということです。先生は誰です
かというと、宗祖親鸞聖人です。

親鸞聖人の教えを聞いてお念佛して歩ませていただきます、というのが報恩の歩みなんです。

その「お念佛」についてどう教えられているかというと、

ただ念佛

その「お念佛」についてどう教えられて
いるかというと、

それ人間に流布してみなひとのここ
ろえたるとおりは、なにの分別もな
く、くちにただ称名ばかりをとなえ
たらば、極楽に往生すべきようにお
もえり。それはおおきにおぼつかな
き次第なり。

よ、極楽に往生するということは不確かですよ、といわれているのはどういうわけでしょうか。

これは、ただ念佛の「ただ」が問題なんです。

では、「それはおおきにおぼつかなき次第なり」といわれている。口にただ称名ばかり称えてもおぼつかないです、極楽に往生するということは不確かですよ、といわれているのはどういうわけでしょうか。

称名

仏道修行は数々あり、やりたかったらやってみてもいい。だけど、最後まで出来ますか。大体の修行は、心を静めて精神統一、煩惱を断ち切って悟りを開く、というものです。眞面目に修

仏道修行は数々あり、やりたかったらやってみてもいい。だけど、最後まで出来ますか。大体の修行は、心を静

あります。帰命の心

「南無」というは帰命、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏というはすなわちその行」といえり。

たい自分であり、断ち切りがたい私こそ、阿弥陀仏の本願が起こされただと氣付かれたのです。浄土真宗の念仏は、自力の力みがすたつていく念仏なのです。

今までのお念仏者のことと思い出してみてください。電車やバスを待ついるときに、ナマンダブナマンダブ農作業が終わって帰るときに、ナマダブナマンダブ。このお念仏であり

たい自分であり、断ち切りがたい私こそ、阿弥陀仏の本願が起こされただと気付かれたのです。浄土真宗の念仏は、自力の力みがすたつていく念佛なのです。

と解説なさったのが、蓮如上人の「御正忌の御文」であります。ナムアミダブリに意味がある。南無というのは帰命。発願回向とは、阿弥陀如来が願いを起して、私に御徳のすべてを回し向けて下さいましたということです。その証拠に、ナムアミダブと申すところに喧嘩もだんだんおさまってくるということがあるじゃないでしょうか。お念佛が平和の道です。心身の落ち着きをいただく道なのです。

（末代無智の御文）真宗聖典 八三三頁
かぎりは、称名念佛すべきものなり。
ねてもさめても、いのちのあらん

のこと一つということです。「正信偈」の終わりの「唯可信斯高僧説」の「唯です。お念佛一筋です。それはどうですか」「地獄は一定すみかぞか」の自分だからこそ、お念佛一筋なんす。どうしてですか。地獄一定の身こそ本願がかけられていて、わが名稱えよ」と誓われている。そのこと気付き、ただ念佛する。その誓いのために掛けられた誓いである、願であるということをいただいて、そのところに「ただ念佛」なんですね

す。いつでもどこでもだれでも、年齢の差別なし、学歴・教養の差別なし、ナマンダブナマンダブと申します。これが弥陀の本願の名乗りであり呼びかけであります。お念佛申しながら喧嘩するという人はよっぽどのことですね。手を合わせてナマンダブナマンダブと念佛申せば喧嘩は終わりです。手を合わせたら喧嘩はできません。尊敬の心、帰命の心が合掌になっていますから。帰命は必ず礼拝、礼拝は必ずしも帰命にあらず、帰命の心から礼拝であります。帰命の心からナムアミダブと申すのであります。

仕事が無くなつた、定年退職だ、といつてもなお仕事がある。お念仏申すという仕事があるんですよ。お父さんお母さんはどういう人でしたかと聞かれ、「お念仏の人でした」。そういわれるお父さんお母さんになつたらいかがですか。それが大事ではないですか。

どれほど財産を残しても、遺産相続のもめごとなどあって大変です。それでも財産を貯めたいという人がいるかもしれません。とにかく、お念仏の相続は忘れてはいけない。遺産相続よりもお念仏相続であります。

真の御礼

「ナムアミダブ」というインド語は、大きい命に感謝します、頭が下がります、真の智慧に深くうなづきます、という意味があります。いい言葉であり、最高のお礼なんです。「ありがとうございます」も悪いですね。「ありがとうございます」というときは、いい顔になるでしょう。その「ありがとうございます」の最高にして世界共通言語が「ナムアミダブ」という印度語なのです。このお念仏「ナムアミダブ」をどういう気持ちで称えますかといふと、こう親鸞聖人は仰っています。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ず

れば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

（『歎異抄』後序 真宗聖典 六四〇頁）

このお言葉の「親鸞」のところに、皆さんのお名前をいれて読んでください。弥陀の本願は私のためでした、数知れない「業」を持った身である私を助けようと思い立つて下さった本願のかたじけなさよ、と仰っているのです。生の親鸞聖人の信心に触れさせていただくお言葉ではないかと思います。

生きる力の根源

曾我量深先生という方は、「お念仏は我々に、この世に生きる力の根源を与えて下さるんですね。これによつて、それより一日の勤めが始まるのである。朝起きたら、ナマンダブナマンダブといつて起きましょう。また夜眠るときも、ナマンダブナマンダブといつて休みましょう。普段の日常も、ナマンダブナマンダブといつて、思い出したら

「ああ、たいへんだ、たいへんだ」などとばかりいわないで、「ナマンダブナマンダブ」と申していくんですね。そして、そのお念仏を申すことが出来るというのは、数々のお念仏を相続して下さった方々のご苦労があるわけです。そのことに報い、お応えしていく。それが私たちの人生の務めではないでしょうか。

このことをこの報恩講に際しまして、あらためて感ずるわけであります。このたびは、富山別院の報恩講にご縁を賜りまして、皆様にお逢いをさせてい

す。どういう「めぐみ」をいただいたかということを知らなければ、ありがとうも出てこないです。

また、自分は、どういうとおりえがある人間かといつても知れたものです。考えてみましょ。どんなにいいところがあるといつても知れたものです。

それよりも、この身をいただいたいうこと、そしてこのお念仏のお話を聞かせていただいたということ、こういうことが大きな「めぐみ」なのです。人生は悩みが多いけれども、その悩みの中にもお念仏できるチャンスがある。そういう具合にして悩みに遇つていく道があるわけです。

報恩は相続



ただきました。どうか、お法を聞くお身体ですので、お大事になさいまして、別院をいよいよ繁盛していただくよう、聴聞一筋に歩んでいただきますよう念ずることでござります。どうもありがとうございました。

「念佛者九条の会・大谷派九条の会」

合同全国集会に参加して

テーマ

再び動き始めた改憲論～今、われわれの運動を広げるためによ

期日

二〇一三年一月二十一日

会場

浄土真宗本願寺派神戸別院

改憲の第二波がやつてきた。今度の波はさらに大きい。今再び念佛者が立ち上がりよう。東西本願寺の九条の会が結集して、「殺すな殺させるな」の声を広げてゆこう。

【基調講演】高田 健氏（許すな！憲法改悪・市民連絡会事務局次長・九条の会事務局）シンポジウム…高田 健氏・玉光順正氏（真宗大谷派）、杵築宏典氏（浄土真宗本願寺派）

主催…念佛者九条の会・大谷派九条の会

去る一月二十一日、本願寺派神戸別院で「念佛者九条の会・大谷派九条の会」合同の全国集会が開催されました。

参加者は約百名、大谷派からも三十名ほどの参加があつたようでした。

講師は高田健氏で、「再び動き始めた改憲論」について講演されました。

「九十六条から九条へと改憲がすすめば、九条二項は削除される。そして集団的自衛権により、日本もイギリスのように、アメリカが攻撃した国と一緒に攻撃しなければならない。すでに自衛隊は海外での活動を見据えて、グアムとアフリカのジブチに海外拠点という名で独自の基地をもっている。さらにジブチ国内では自衛隊員や海上保

安官に治外法権的な保証が認められて

第十組 永宗寺 永崎 眇



富山教区ブース

子どものつどい

「東本願寺 子

どものつどい」と検索すれば詳しい様子や動画を見ることができます。そして私達が提供してきたものは「あんばやし」です。この「あんばやし」という言葉をご存知でしょうか。富山市近辺で使われる言葉のようですが、こんにゃくを串刺して味噌だれをかけたものと言えば富山県内の方ならば記憶にあるのではないかでしょう。

私も子供の頃にお祭りの屋台でルーレットを回し、出た数字の本数のこんにゃくをもらつて「五

本だけしか当たらんだ……」「俺、二十本も当たたぞ！」

一説には、味噌が「餡(あん)

あります。

最後に、今後も教団内外にアピールしていくことを決定して閉会しました。

第十組 永宗寺 永崎 眇

「林(はやし)」で

四月五日に本

山で行われた

「子どものつどい」で他の教区

と共にラーメン、

カレー、焼き込

みご飯など多種

にわたって食べ

物を振る舞つ

きました。イン

ターネットで

運んでくれる子供がいたりしたおかげ

でもルーレットという他教区の食べ物

にはない遊び心が受けたか何度も足を

供たちはあまり来ませんでした。それ

た坊主頭のおっさんである私が立つて

いたのが不気味だったからなのか、子

供たちはあまり来ませんでした。それ

で、開始二十分で用意した二千本のあ

んばやしを提供することができました。

そして今回参

加して私なりに

感じたことは、

教如上人四百回

法要という厳肅な儀式と「子ども

のつどい」という楽しいイベ

ントを同時にを行うということは大変な

ことのように思いました。しかしこれ

からはこの相反すること、厳肅さと樂

しさをうまく融合させる。今風に言え

ばハイブリッドな法要がこれからは教

区、別院、各お寺でやっていかなければ誰も寺院には寄り付かなくなるで

よう。決して大げさな物言いではない

と思います。

最後になりますが共に働いたスタッ

フの方、当日参加できないにも関わらず協力していただいた多くの方、心より感謝いたします。ありがとうございました。



あんぱんやしの看板

「あんぱんやし」であると言われています。

初めは、「あんぱんやし」という名前から食べ物の得体が知れなかったからなのか、或いは店の前にコンニャクを持った坊主頭のおっさんである私が立つていたのが不気味だったからなのか、子供たちはあまり来ませんでした。それ

た坊主頭のおっさんである私が立つていたのが不気味だったからなのか、子供たちはあまり来ませんでした。それ

でもルーレットという他教区の食べ物にはない遊び心が受けたか何度も足を

供たちはあまり来ませんでした。それ

た坊主頭のおっさんである私が立つて

いたのが不気味だったからなのか、子

供たちはあまり来ませんでした。それ

で、開始二十分で用意した二千本のあ

んばやしを提供することができました。

そして今回参

加して私なりに

感じたことは、

教如上人四百回

法要という厳肅な儀式と「子ども

のつどい」という楽しいイベ

ントを同時にを行うということは大変な

ことのように思いました。しかしこれ

からはこの相反すること、厳肅さと樂

しさをうまく融合させる。今風に言え

ばハイブリッドな法要がこれからは教

区、別院、各お寺でやっていかなければ誰も寺院には寄り付かなくなるで

よう。決して大げさな物言いではない

と思います。

最後になりますが共に働いたスタッ

フの方、当日参加できないにも関わらず協力していただいた多くの方、心より感謝いたします。ありがとうございました。

ありがとうございました。

第十組 善性寺 赤田見心

他教区交流研修会 in 大阪

テーマ 仏法に学ぶ関係存在

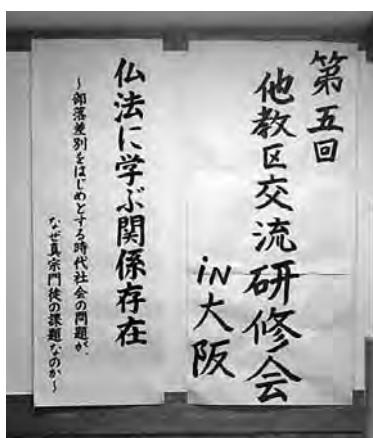
～部落差別をはじめとする時代社会の問題が、なぜ真宗門徒の課題なのか～

期日 二〇一三年二月五日～六日
講師 訓霸 浩氏（真宗大谷派解放運動推進本部委員）
山本義彦氏（部落解放同盟大阪府連合会浅香支部顧問浅香地区まちづくり協議会会長）

私の参加は、今年で二回目となる。

参加動機は、他教区の方と交流することによって何かまた新しく学ぶところがあるのではないかと思つたり見聞が広まるのではないかということであつた。一日目は、午後から開会式などの後、訓霸氏による講題「糾弾への呼応—解放運動と真宗—」として講義を聴き、班別座談を行つた。内容はご自身の解放運動に関わることによつて得られた経験、そして、そこから見出されてきた課題といったようなものであつた。

ことに糾弾ということを通して、宗門のあり方が問われ、そしてまた、私たち一人一人に課せられた願い、差別問題とどう向きあつてきくのかという事を考えさせていただく機会となつた。途中、部落問題学習資料集にある「米田富さんの怒り」の実際の音声をお聞きしたり、駒井昭雄さんの映像を見せ



き抜かれたと讃嘆するばかりである。驚くべき不屈の精神の物語であった。後半は、ご自身が中心となって関わられておられた。講義の後、フィールドワークとして、実際に浅香の町を歩いて見回つた。わたしは、実際の「まち」はおられなかつた。為せば成るとはこのことだ。地域の活性化を考えた時に、私の地域の自治体の方にも知つて頂ければならないという事を思つた。

来年、わたしは参加しない。この研修会は参加者が多すぎても成り立たないと思う。富山教区から、また新しい参加者を希望するものである。なかなか知らない人ばかりの所に顔を出そうという気には、なれないかもしねれない。

しかし、日本全国に、内容は違うけれど、自分と同じように悩んでいる若い同行がおられるのだということを実感していただければと思う。

今、他者を敬い、思いやることは、一体全体、実際の営みとして、どういうことなのかな。これからも皆様と共に考えて生きたいと思う。

世話人の方々には、この場をお借りして、深くお礼申し上げたい。

第九組 西圓寺 白鳥昌宏

けん見 ぶん聞 ③ ～ これながやつとつちや ～

今回紹介は、第十一組 寺族学習会

富山教区第十一組の北組小会で、十年程前から報恩講の忙しい時期を除き毎月、柴田秀昭先生（第十

一組 圓常寺）に『教行信証』などの講義をしていただいています。小会での学習会ということもあり、決まった人しか参加していません。柴田先生から、組主催にし、寺族だけの勉強会にした方が良いのではと提案がありました。

組の執行部に相談したところ、柴田先生に講義内容やテキストはお任せするということで、二〇一三年二月七日から「寺族の皆さん自身の疑問等を語り合い、もっと学べる場を！」との願いを込め、第十一組で寺族の為の学習会が始まりました。昨年度は五回を終了し、今年度は報恩講の忙しい時期を除き毎月行う予定にしています。

先生と組の執行部から、「寺族であればどなたでも参加して良い」

教化日誌

(一)〇一三年一月一日(二)〇一三年六月三十日)

27日 御遠忌法要委員会 教化推進部会

15日 児連手づくりおもちゃの講習会
16日 教育防衛会本廟奉仕研修

<p>3月 4日 連区児童教化指導者研修</p> <p>(金沢教区)</p>	<p>6月 1日 五一会（教区内物故住職追恩法要） 8～9日 連区差別問題学習会（小松教区） 15日 御遠忌法要委員会 教化推進部会 16日 ハンセン懇第二連絡会公開講座 17日 御遠忌法要委員会 法要参拝部会 20日 富山県大谷派教師会研修会 21日 あいあう会公開講座 </p>	<p>22日 御遠忌法要委員会 本部会 23日 共学研修会 29日 御遠忌高札立柱式・御遠忌委員会総会 30日 連区推進員研修（富山市） 31日 住職総合研修 [講師 安富信哉氏] </p>	<p>5月 24日 教区准常衆会修練会 25～26日 解放運動推進協議会研修旅行 26日 声明作法講習会 [講師 西山恵紹氏] (奈良県) </p>
--	---	---	--

より良いもの、質の高い成果を上げていくには、どうしたらよいのか。ビジネスの世界では事業活動における管理業務を円滑に進めるマネジメント手法の一つとして「P D C A サイクル」というものがある。つまりPlan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)の四段階を繰り返すことによって業務を継続的に改善するのである。この手法はビジネスの世界に限らず、さまざまなものに活用できる。当たり前のように思える手法だが、現実は改善がうまくいかず、いたずらに計画と実行を繰り返す悪循環になっていることが多い。したがって最も重要な部分は評価である。『如大地』がいつたいどれだけの人に読まれ、役立っているのかレスポンスがほしい。新生『如大地』は今期「同朋会運動」の学びをとおして「これから」を考えしていくきっかけを発信していくための高い教化広報誌『如大地』へと改善していきます。どうかご協力をお願い申し上げます。

編集後記